

岡 田 武 松 先 生*

鈴 木 清 太 郎**

私が岡田先生の名前を知ったのは旧制中学の上級のときだから、今から54年も前になろうか。それを日露戦争前後とすると、先生の31才頃であろう。博文館の本屋から近世気象学と言ったと思うが、理学士岡田武松著として4・6版位大の大きさのものが出版された。それを近くの書店から取寄せて見たのが、そもそも先生の名前を知った最初らしい。一応はその本を読んだような気がするが、その時の書物から受けた感銘は一向私の記憶にない、それは元々私は始めから気象を本気にやろうと思わなかったのだから、いたしかたない。

然し例外はある。私は数学を専攻する意志も昔から無かったし、又その方面の才能もなかったが、中学3年頃だったか、寺尾寿先生（当時麻布の天文台長）の算術教科書を読んで、いたくその本に傾倒した事がある。種本はフランスと思われたが、文章といい、特にロジカルな説明の進め方は算術とは全く機械的なもの、又最も単調な、そして乾燥なものと思った私を驚ろかせたものである。これは私だけの感銘ではなく藤沢利喜太郎先生も何所かで、あの本は寺尾博士の名著である、もうあんな本は先生には書けまいと言ったことがある。

岡田先生の青年時代のもの、寺尾先生の円熟した時代の本とを比較するのは、元より妥当ではない。又当時の気象学が記述的であり、羅列的で且つ、博物学的であるために少年の理智に訴えることが多くなかったのかも知れぬ。

この近世気象学刊行の僅か以前に有名なハーンの気象学初版（1900）が出た。岡田先生はハーンを師と仰いでいた（生前、本多光太郎先生に何かの機会にハーンの名前が出たら、ああ、岡田君の先生かと言われた事が私の耳底にある）から、その影響が色々先生の処女作に現

われるのは当然である。然し、まだ、スカンジナビア学派の波動説、不連続面、気塊論の現われぬ時代である。又ウィルヘルム・シュミット先生がハーンは気候学者であると評した位であるから、ホルムボー、どころかブランド、エックスマーの力学的、物理学的、熱力学的、予報学的最近気象学より、大きな距離のあったのは止むを得ないことである。然し当時において、この種のもの、は、欧米においても珍らしく、ましてわが日本においては破天荒のものと言えよう。

私の中学は四国のある田舎の町にあったがその初代校長は川又と言って修身倫理以外に英語も教えていた。この先生のお宅にある用で伺ったときの事と思う。私が物理をやるとい志望を聞いての上であったかも知れない。「私は岡田さんを知っている。奥さんはオミツさんと言って妻の友達です」と言われたのを記憶している。これは私の岡田先生の名前を中学時代に聞いた二度目と思う。川又先生は私の御世話になった恩師の中で第一の恩師だが、先生は古い一高卒業生（卒業名簿にもっている）と聞いたが、どうして大学へ進学されないで一生を片田舎の中学の教師で終ったか今に分らない。そこで後になって私がこの柏に来てから岡田先生連の集いの折に、川又先生の話をして「あゝ知っている」と言われた。どういう関係で知っていられるかと、そこまで進んでいく事はどうも出来にくかった。そういう事について、まだもう一つ話がある。

私が京都の第三高等学校に入学したとき、もう古い話だが、同じクラスに清水菊平君というのがいた、今長崎の三菱造船所の顧問をしているが、人の話では、ディーゼルの権威者であるとのこと、彼は昔から船が好きなので、私に色々な軍艦の構造の話をしてくれたが、この清水君が僕もほんとうは物理をやりたいが、なんだか、恐ろしい見たいでやれない。然し中学時代に気象台の、岡田武松さんのところによく行って話を聞いたという。それから色々な話をしてくれたが、そのうちこんな事を言ったよ

* Seitaro Suzuki: Life of Prof. Takematsu Okada

** 気象庁研修所

うにおぼえている。「岡田さんに、父が学資を出していた」。これは私の聞き間違かも知らない、例え幾分これが本当だとしても、岡田先生にとって不名誉でも何でもない。むしろ秀才であり好學心の強かった証査で、御本人の栄誉とすべきではなからうか。

後年、柏時代に教官室で友人の清水君の話を生先生にしたら、菊平君の父親は銀行家であると申された。そして清水君は生れつきおとなしいとだけ付け加えられた。高等学校時代、清水君の身の回り、又色々の持物から見て、彼を金持と思っていたが、成程、銀行の重役の息子であったかと合点し、察するに岡田先生は清水君の中学時代に数学とか英語とかの学問を、少し見ていたのかもしれないと想像した。

私が身近く先生の温容に始めて接したのは、それから4、5年後の東京大学の三年頃で、それから気象学の特別講義で1週1時間、一ケ年間御眼にかゝった。ホオヒゲを生やしていられたかも知れない、ふけて50前後と思った気がするが、実は今数えて見ると実は36そこそこで先生の壮年期にあたるのである。先生というものは、学生にとって、本当よりずっと年とって見えるものとみえる。

私は先生の講義が好きで、後年台長時代に九州大学農学部講義に來られたときにも陪聴したが、矢張名講義と思った。名講義にも色々あるが、寺尾寿、田丸卓郎先生の言葉多からず、少なからず、論旨一糸乱れずと言うものがあるが、又岡田、木多(光)先生のように平易、平明で、ゆっくり説くというものも教授として、優れたものではなからうか。今でも私の頭に残るものは、ポッケルの山越気流の数理解析の論文の紹介で、簡単な微分方程式を旨くとして、實際観測と比較するのは印象が深かった。

然し一般に私と同じクラスの仲間は私程には関心がなかったように思う。実は彼等は殆んど全てと言ってよい程、田丸先生の力学講義の崇拜者であったのである。

先生の講義のときに、こんな事をオドケたような調子で言って、聴講者を笑わせた。「皆さんの中、ソロバンのタッシャな人は一つこの問題を解きませんか」。

先生は数学をよく尊重し、それを気象人に取り入れることを秘かに心掛けたと思う。実に明治末年の当時の気象台には抽象の数学に通じた人はいたが、気象研究に数理を縦横に駆使する人は少なかったようだ。そのためでもあろうか、講義のときなどに、北尾次郎博士の仕事をよく推奨されたのを覚えている。

いつか先生が田中館先生の御供をして、駒場の東大農科大学に北尾博士を訪ね、焼失後、新築になった教室を

田中館先生がほめたところ北尾博士は「たんと、お焼きなさい」とシャレられたとの事。この話は私も2度あまり聴いたから珍しい話でないかも知れぬ。こゝでついでに北尾博士の講義を聞いた故九大教授加藤農学博士の直話を紹介すると、北尾さんは芝居が好きで、講義によく芝居の話が出たという。又三高の漢学の先生山内晋郷氏の教室での話に君達は理科の学生だが、私の同郷(鳥取)の北尾さんは科学者でも漢文がステキに出来たよと言つて、私達のその方面の不熱心さをヤユした。

さて岡田先生は数学を気象界にカルチベートされることに苦心した一つの現われはその方面の堪能な士を気象台に迎えようとしたことでもわかる。藤原咲平博平がそれであり、地震の中野広博士がそれであった、その伝統はずっと続いて後になっては、北尾さんの数学も今日では珍らしくなくなったとさえ先生が言われる程になった。

然し先生は数学に対し、関心と熱意を持たれたが、御自身には数学を主題とした論文はあまり見られなかった。藤原博士の音の異状伝播は岡田先生のさづけられた論題と秘かに聞いていたが、藤原さんの数学の相談相手は田丸卓郎、佐野静雄の2先生とのワワサであった。但し芦湖のセイシ論文には数学が大いに入っている。もっとも、共著者に藤原博士がいる。この論文が熟しつゝあるとき、確か大正2、3年頃かと思う。先生が東北大学に気象の講義に來られたことがある。ある晩仙台の針久旅館(?)に友人と一所に先生を訪問したことがある。卓上に原稿紙がおかれてあったが、それはセイシの草稿と伺われた。先生曰く、「どうも式に分らぬところがある。藤原君に聞いたゞして見ねばならぬ」とのこと内容に分らなかつた。

岡田先生は藤原博士の数学を常々賞め、藤原さんの本領は数学にあると言つて、数学に帰るべきであるとさえ言われた。これは藤原さんに対する多くの人の側面観の一つと思う。

私が先生と本当に親しく御話が出来ようになったのは大正十一年から私が九大に就職した時からで、先生がその農学部新設の二、三年間、気象の講師となられた時とか或は福岡管区気象台の台用で見えられた時である。物理の九大の工学部の桑木アヤ雄博士が友人なのでその歓迎会の末席に連り、博多新三浦の水たき料理で御馳走になった時など御二人の話で側で承った思出がある。例えば、桑木先生が、岡田先生に、「君、この頃、英詩は」と言われた事などである。御尋ねすると先生は一高時代から英詩を好まれたとの事。この柏の研修所(昔の気象員養成所)でも学生に英詩を教えられた事を

私は記憶しているし、又そうだと話されたこともある。

一体先生は英語に堪能で、読み、書きは勿論の事、聞くのも話されるのも巧みであった。いつかこんな事を私に話された。どこかの会に出て、英語でアイサツした事があったが、次の折に秩父宮妃殿下にお会いした時、あなたのいつかの英語の出来は大変によかったと賞められたと私に話した。余程得意であったと考えた。先生の英語は先づ神田の正則英語学校できたえられ、有名なその校長斉藤秀三郎氏の教を受けたという。斉藤さんの英語はどうでしたかとお尋ねしたら、まづいと言われた。元よりそれは英作や解釈でなく発音やイントネーションの方であろう。然し一高で教わった夏目さんの英語を賞められ、発音も立派であったと言っておられた*。又先生は英語ばかり堪能であったのではなく、独逸語も旨く独文で独逸専門雑誌に寄稿された。仏語も外国語学校の夜間講習で本式に習われたのではなかったろうか。こんな話もされた、万国気象会議に出席すると仏語で話すものがあるが、英国の気象学者(シンプソンかも知れない)が今のは何と言ったかと側の私に聞くとあった。でフランス語をよく聞く耳も持たれたと見える。いつも先生は中村精男博士や和田雄治博士の仏語の巧なのを賞められていたが、御自身は、英、独、仏の三ヶ国の言葉を身につけていたと思うと、この点だけでも偉らいと思う。一つは記憶力の旺盛であったのにもよるであろう。その記憶のたしかなのは専門の文献によく通じ、あの雑誌の何年の何巻何頁にあるなど指摘されたのもわかる。

英詩は誰れを好まれたか知りたかったが、ついに聞きそびれた。又漢詩にも一隻眼があったらしく、竹外の有名な桃花水暖云々を引用して近江と摂津との小気候差を示したり、宇田道隆君の親父は漢詩人であったと言われたように記憶する。

先生の気象の文献に通ぜられた事は申すまでもなく人の知るところだが、金工とかガラス吹きとかについても、造詣の片鱗を示され、気象台にも旋盤工とか木工とかをいち早く入れられた。

私は一度、なぜ先生が気象を専門に選ばれたかと御尋ねしたことがある。若いときある米国人の地文の本を読み、それから気象に関心を持ち初めたとあった。又先生の先祖の事も一寸話された事がある。祖先はハリマ(今の兵庫県の一部)で、その殿様が国改えて布佐に移っ

て来たので、一所に来て庄屋などをやっていたのだという。先生の友人柳田国男さんの先祖も同様な事があった様に聞いている。然し柳田先生にたゞすと布佐へ来た時代がちがうそうである。中学—尋常中学—は日比谷の有名な一中であって、高等学校は本郷の昔の一高のことはよく知られているが、そこでの同窓には知名な士が多く、林博太郎(国、文、政)新村出(文)、井上匡四郎(工、政)の事を一、二度同窓として話されたことを覚えている。東大の物理や化学の同窓としては柏木好三郎、桑木アヤ雄、早川金之助や真島利行(化)先生を数え、その人々の話をされた。桑木さんが飛び抜けてよく出来たことを度々うかがった。柳田国男先生曰く、岡田君の組のものは皆秀才ぞろいだと。

岡田先生には美德も多いが、特に感じたのは自慢話を勉めて、さげられたように思う。英語の話を好んでよくされたが、御自身のタッシュナ事が表面に出ないから、人にきざの感を与えなかった。

以前には人に、時々自分は學問が出来なかったとユーモラス句調で、述べられた。聞いている私達は反って顔まげがして何と言ってよいやら分らなかった。

又一方よく人を見る明があり、必ずしも、エコヒキが全然なかったとは言い切れないが、人の配置には、その当を得ており、又秀才を集めるにも妙を得ていて、それ等の人々で、気象台は益々立派になっていった。秀才は学校の当局者よっての推センよりも御自身でよく調べられたように思う。

機会あれば研修所で研究の必要を説かれたが、ずっと晩年になってはあまりそれを聞かなくなりましたが、医術と予報とを比較して、似たところがあると、學問としての予報の不完全を指摘して、その方から見ても研究をゆるがせに出来ない事を説いた。後になっては研修所の入所式に物理学の必要性を強調される訓辭が多くなった様に思われる。これには矢張理由がある。

先生は頭脳明敏な学校成績の最優秀な人ではなかったかも知れないが、ジャーナリズムを極力排折されたにも関わらずその政治性、學問の価値、研究に対する態度、書籍への愛着、機関の組織力、人材モウラする等は、明治、大正を通じて科学者の内では、その比を見ないと思う。ために気象観測網の全国への拡大、図書館の充実、人材、研究者の台内への誘致が行なわれたと思われる。

然し、一面欠点が全然ないではなかった。例えば一種の気むづかしいところがあったり、気の知れぬところもあった。又権謀術策がないでもなかった。約束される

* 厨川辰夫先生の話だと夏目先生は英文学の大先生だけれど、所謂実用英語はどうしてどうして中々のものであった由。

好意はあったが、それをあくまで守られるとは必ずしも期待出来なかった。私はいつも思う。とに角先生は外柔内剛の典型的な一人ではなかったかと。

もう一つ言い落したと思われるものがある。先生は気象学一般（気象器械も含めて）に通曉されたばかりでなく、専門以外の地震学、海洋学にも明かだった事でそれは驚くばかりで、一方御門違いの建築についても一つの主張があり、当時の文部省技師の作った建物とは様式において非常に異なるものが、先生在職中の建物にある。例えば神戸の海洋気象台、柿岡の地磁気観測所、布佐の

気象通信所等の構造物はその一例である。元より、これは先生の趣味だけでは説明出来ないもので、昔の文部省の役人に対して、自分の設計を貫き通す頑固の気質が物を言っていると思う。

口絵「古い写真」

こゝに掲げる古い写真は知人よりの賜物で中にその知人の親父も入っている。この画中に岡田先生が居るといふので、こゝに出させて貰ったのだが私には分らない。然し先生の常に尊敬していた北尾次郎先生が居ることだけは確かである。

気象集誌投稿および編集規定の一部改訂

気象集誌の投稿編集規定の一部を下記ゴチック活字で示したように改訂しますからまちがいないようお願います。

“3. 論文・要報 気象集誌には原則として会員の寄稿による論文、要報、論文概要および学界記事、消息その他をのせる”。

“7. ページ制限 論文は簡潔にわかりよく書くこと。原則として論文の長さは図を含め印刷ページで16ページ以内とする。ただし内容によっては例外を認めることもある。要報の長さは印刷ページ4ページ以内とする”。

“8. 7) ヘッディング（ページ上欄の省略題名）および国際十進分類法（U. D. C.）は指定する”。

なお、7. ページ制限の項の中にありました論文の印刷ページ「超過分については1ページあたり1500円の印

刷費を投稿者が負担する”という枠をはずすことになりましたが、“論文を簡潔にわかりよく書くこと”という制限はそのまま生きております。ただ十分簡潔に書いても印刷で16ページを越す論文については掲載をおことわりすることなく極力印刷できるようにしたいという精神でありますから、意のあるところを御了承の上ふって投稿方をお願いします。

国際十進分類法（U. D. C.）については投稿者で指定されるのが望ましいのですが、手もとに資料がないため指定がむづかしい方は編集で指定します。ヘッディングの方は著者が指定されるよう希望します。

また論文概要（アブストラクト）をのせるようにしますから他の学術雑誌に発表された“気象学およびこれに関連する分野の学術論文”のアブストラクトをおよせください。

〔雲鏡〕 雲の呼びかた

気象用語審議の報告があり、「巻雲」は「カンウン」と呼ぶべきだというようなことがあげられたそうである。考えてみると、巻雲とか積雲、層雲などと一般にはなじみのない呼び名ではあるまいか。

雲の呼び名はこの際、学術用語と、一般に使われることばに分け、学術用語には学名を、また一般に使われるものには、今まで俗語と考えられていたものを使ったらどうか。

気象技術者や、気象学者には、cirrus. stratus. cumulus. といえ、だれにでも通じるようになりたく、Cu-humilis. Cu-congestus. Cb-calvus. Cb-capillatus. の区別がわかるように再教育してもらいたいものである。現在、わたくしは予報課の現業に勤務しているが、予報当番の人が「積乳雲の頭がこうなったやつ」と手ま

ねをするとか、「CKが出ていたから、明日の天気は…」などと検討されるのはどうかと思う。

お医者さん——看護婦さんまでも——は、現に学名を使っているらしく、われわれ門外漢にはさっぱりわからない。わからないといって別に困らない。生物をやっている人達も学名である。

つぎに、一般の通用語であるが、古来から、うすぐも、はれぐも、きりぐもなどがある。無理して「カンウン」などを押しつけられることもあるまい。今まで学者は、通俗語を使うと権威が無くなるとも思うのか、あまり使いたがらないように思われる。ひつじぐも、さぼぐも、あめ（ま）ぐも、ゆきぐも、かみなりぐもなどと使ったほうが、よっぽどわかりやすいと思うがどうだろう。ついでに、動植物の名はかな書になっているように、雲の名もかな書にしたい。

（広島地方気象台 吉持 昭）